

🏠 ともに歩み続けるために

地域社会との共生

毎朝の清掃から会話が始まる

建設工事には、地域社会とのコミュニケーション活動が欠かせません。現場見学会やミニコミ誌の刊行などで工事を理解していただくよう努めていますが、毎朝の清掃から会話が進み、工事への協力と支援の輪が広がったケースも数多くあるのです。

地域と共にある現場 ～砂子沢ダム本体工事

秋田県鹿角郡小坂町で鹿島JVが建設を進める砂子沢ダムは、洪水調節、水道用水の供給などを目的とする総貯水量865万m³の重力式コンクリートダムです。雪深く冬期工事のできない環境ですが、鹿島JVは地域の各種イベントに積極的に参加して、「地域と共にある現場」の創出に努めています。

小坂町が毎年6月に開催する「アカシアまつり」もそのひとつです。3年前から参加していますが、第25回となった2008年も、発注者の秋田県と共同で「砂子沢ダム広報館」を出展。ダムのつくり方の展示や実験・工作コーナーなどを設けました。現場見学会も行われ、たくさんの人が参加してくださいました。工事は2010年度の完成を目指し順調に進んでいます。



アカシアまつりに出展した「砂子沢ダム広報館」

仮囲いにマンガを描こう ～プラザノース建設工事

2008年5月1日、さいたま市がPFI事業として計画した複合施設「プラザノース」が、同市北区にオープンしました。鹿島を代表とする12社の企業グループが、区役所や図書館、ホール、コミュニティ施設などを設計・施工し、15年間にわたり維持管理・運営するもので、地域の中核施設となります。

工事期間中に、さまざまな市民参加型イベントを企画しました。そのひとつが市民による「現場の仮囲いにマンガを描こう」です。同市在住でPFIの総合プロデューサーの漫画家・あらい太朗氏指導のもと、仮囲いにマンガを描いてもらいました。また、もうひとつのイベントでは、タイルに焼き付ける下絵をデザインしてもらいました。そのタイルは「プラザノース」の遊歩道でご覧いただけます。



仮囲いにマンガを書く小学生

プラザノース遊歩道のタイル

南極にコンテナヤードを造る～鹿島道路

1982年の就航以来、日本の南極観測を支援してきた砕氷艦「しらせ」が2008年退役しました。最後の任務となった第49次南極地域観測隊に鹿島グループ「鹿島道路」の木村直之主任が、建築土木隊員として参加しました。任務はコンテナヤードの造成工事。第51次隊からの第2代「しらせ」就航に伴い、物資輸送方法がコンテナ輸送に移行するため、コンテナを保管するスペースが必要となったのです。

工事は幅15m、長さ200mの平坦な土地を造成し、表層は広



帰国前の集合写真(2008年元旦)



特殊シートの敷設

げるとハニカム状になる特殊なシートの上に土砂を入れ、安定させる工法を採用しました。木村主任は資材確保から重機のオペレーションまでほぼ一人で完遂。今年3月に帰国しました。

企業市民としてのスタンスで

私たちは財団活動を通じた学術や文化振興、教育支援などさまざまな社会貢献をしています。

また、こうした事業を継続することだけでなく、企業市民としてのスタンスで社会に寄与することも重要な役割と考えています。

消防訓練・救助犬訓練に旧日本社ビルを提供

鹿島の新本社ビル移転に伴い、旧日本社ビルの一部を使用して、NPO法人日本救助犬協会による災害救助犬訓練と、赤坂消防署の消防訓練が行われました。解体前のビルでの訓練は、大規模な構造物の災害を想定した訓練の場として貴重な機会ということで依頼があり、火災・震災発生時などの救助活動の一助になればと、協力しました。

2007年9月30日に実施された災害救助犬の訓練では、地下3階から地上3階のフロアを使って、協会スタッフ39名、救助犬30頭が参加し、各種訓練が手際よく繰り返されました。10月1～22日にかけて行われた消防訓練では、赤坂消防署をはじめ近隣の消防隊員・各事業所の自衛消防隊員ら延べ320名が参加。鋼

製のドアをエンジンカッターで切断するなど、実際の被害状況を想定した訓練が実践されました。



はしご車からの放水



オフィスフロアでの訓練

JICAの研修に協力

鹿島葉山水域環境実験場は、国際協力機構(JICA)が発展途上国の水産技術者を対象に実施している「持続的増養殖開発コース」の研修生を1996年よりほぼ毎年受け入れています。

2008年度は、エルサルバドル、セネガル、パラオ、モロッコから4名の研修生を迎え、孵化稚魚の初期餌料となるプランクトンの大量培養・長期保存技術や二枚貝の種苗生産技術の実習を指導しました。参加者は自国の水産増殖業発展のためにこの技術をどう活かすか、熱心に意見を交わしていました。

本研修は今回で11回目となり、これまでに、33カ国、延べ72人の研修生を受け入れました。鹿島の技術が世界各地の水産増殖業の発展に寄与しています。



研究室での研修

KAJIMA彫刻コンクール

KAJIMA彫刻コンクールは1989年に創設されました。「彫刻・建築・空間」をテーマに隔年開催され、国内唯一の屋内彫刻コンクールとして、近年は、国内の美術・建築関係者のみならず、海外からの評価も高まり、注目を集めています。

第10回を迎えた2008年は、海外を含めた応募総数277点の中から1次、2次の審査を経て、金賞にゼロ ヒガシダ氏の「INOCHI」が選ばれ、3月に銀賞、銅賞各1点と奨励賞2点を含めた受賞者5名の表彰式が行われました。



金賞受賞作品「INOCHI」

渥美国際交流奨学財団の活動

渥美国際交流奨学財団は、故渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により1994年に設立されました。以来、海外から日本の大学院に留学している優秀な学生12名に、毎年奨学援助を続けています。毎月の例会で学業や生活についての報告や交流を行っているほか、2000年7月に元奨学生が中心となって「関口グローバル研究会(SGRAセグラ)」を設立。フォーラムの開催などで、研究成果を社会に発信する活動も進めています。



チャイナ・フォーラム

都内の小学校で環境教育を実施

鹿島は2006年度から都内の小学校で環境に関する出前授業を行っています。2007年度は2校で実施し、板橋区立第七小学校では技術研究所の高山晴夫上席研究員が講師を務め、同校ペランダでキュウリ、ヘチマなどの「緑のカーテン」を育てている6年生に授業を行いました。緑化の効果、「快適と感じる」には温度や湿度以外の要素も影響することなどを学習しました。

青梅市立第五小学校では技術研究所の山木克則主任研究員が海草のアマモをテーマに授業を行いました。同校は海から遠く離れていますが、学校近くの山も海とつながっていること、森を大事にすれば海もきれいになることを学びました。



アマモの種を植えたポットを海水の入った水槽に沈めます

地域の特性をアピールする

里山から産出する素材を工芸品に活かすなど、地域の特性や歴史的背景をもとにした地場産業が活性化しています。建設の分野でも、構造材や壁面などに地場産品を活用した「地産地消型」のプロジェクトが増えています。

珠洲市多目的ホール「ラポルトすず」

石川県珠洲市に2006年7月、鹿島施工の珠洲市多目的ホール「ラポルトすず」がオープンしました。市政50周年を記念して計画されたものですが、施設建設には設計者と市民がワークショップを重ねて、建築内容やコンセプトを創り上げました。その結果イメージしたのが「軽やかに漂う白い雲の群」。538席の大ホールを中心に9つの群島のような場を、雲に見立てた大小さまざまな半球型のシェル屋根で結びつけることでした。

同時に発注者・設計者・地元市民の協議で採用されたのが、埋蔵量世界一を誇る地元特産の珪藻土を壁材に使用することでした。珪藻土は耐火性と断熱性に優れ、七輪などに使われていますが、断熱性と程よい吸湿性に加え、近年自然素材への関心の高まりもあって、壁土への利用が見直されています。

「ラポルトすず」では、事務室や託児室、多目的ルーム、大ホールの壁に使うことで、温もりのある憩いの場を演出しました。珪藻土のホールの壁は柔らかな音の響きがある、そんな効果もあるそうです。



「ラポルトすず」の全景



屋外ステージにもなる中庭

日田市総合文化会館「パトリア日田」

「九州の小京都」と呼ばれる大分県日田市は、鬱蒼とした杉の山々に抱かれています。10万haにのぼる杉の林は日本三大美林のひとつとされ、筑後川を治める水源涵養林になりました。この美しい日田杉を内外装材として使用したのが、鹿島JVで2007年7月竣工した日田市総合文化会館「パトリア日田」です。

「パトリア日田」は、日田市の自然環境や歴史・文化を活かした街づくりの一環として計画され、「日田らしさの醸成」と「環境への配慮」が建設のコンセプトになりました。

「日田らしさ」の実現には、日田杉や檜の内外装への採用のほか、床や壁面に日田市の伝統工芸である小鹿田（おんた）焼の陶土を練りこんだタイルを用いました。館内通路の壁面には地元の赤土と藁を混ぜた貝灰漆喰を、木材の防腐剤として柿渋を塗布するなど、地元で長く伝承された素材や手法を多用しています。漆喰や柿渋の採用は、化学薬品を使わないことで、シックハウス症候群など課題をクリアできるメリットもありました。

一方で、太陽光発電や屋上緑化、ホール内へ自然採光を導入するなど、環境負荷を抑える最新技術や工夫も施されました。

「パトリア」はイタリア語で「故郷」。誰もが気兼ねなく立ち寄りてほしい、市民みんなで心豊かな街を作っていこう、との願いを込めたそうです。1998年にISO14001を取得し、「環境日本一」を目指す日田市。「パトリア日田」は、文化・芸術の拠点、そして市民交流の場のシンボルとなりました。



赤褐色の漆喰壁



日田杉・檜を用いたホール

JR土讃線高知駅「くじらドーム」

2008年2月26日、新しいJR土讃線高知駅舎がオープンしました。2年前から鹿島JVが施工してきたものです。新駅舎の目玉は、北口広場から建ち上がり、ぐるりと弧を描いて高架ホームを包み込む巨大な木造のアーチ大屋根です。すべて地元高知県産の杉の集成材を使いました。

高知県は84%を森林が占め、その面積率は全国一です。これまで杉は構造材として使われることは少ない材料でした。しかし「森林県高知」をアピールするにはこれ以上の素材はないと、県民らによる景観検討委員会の議論を経て採用されました。

12本の杉集成材大梁と2本の鉄骨大梁が連なるアーチの大架



夕景に浮かぶ木造のアーチ大屋根

構の実現には、ユニット化により高架上での溶接・グラウトを極力減らすなど、安全性と効率的な作業手順を追求しました。土佐らしい頑強さと木の温かみを醸し出したこの大屋根は、「くじらドーム」という愛称をいただき、高知の新しいシンボルになっています。



アーチ組み上げ作業

地場産品の建設素材などへの積極活用以外にも、歴史や文化や自然を建築デザインや設備などでアピールする試みも目立っています。

長崎市立図書館

鹿島を代表企業とするSPC（特別目的会社）によるPFI事業となる「長崎市立図書館」が2007年1月5日オープンしました。



長崎市立図書館全景

鹿島SPCは運営・維持管理などの図書館事業に2022年末まで携わります。

この図書館では、蔵書管理をICタグで行うなど電子化したほか、屋上緑化や太陽光発電などを導入。外観は長崎の街の歴史を感じさせるレンガや諫早石の建物のイメージを継承しました。また、1945年の原爆投下直後に被爆者の救護所となった小学校跡地に建設されたことから、当時の救護所の様子を再現した「救護所メモリアル」と名付けた展示室を備えています。

東北新幹線新青森駅

新青森駅は、2010年度に八戸から延伸する東北新幹線の新駅です。鹿島JVが2010年2月竣工を目指して、新駅本屋・旅客通路・旅客上屋の建設工事を進めています。



完成予想パース

新青森駅舎のデザインのテーマは、「縄文と未来の融合」。青森市が市民や識者による「新青森駅舎デザイン委員会」の答申を受けて採用しました。近くに三内丸山遺跡があることから、歴史や郷愁を感じさせる縄文集落の佇まいをイメージして、外観の一部に遺跡を模した柱のデザインを取り入れることにしています。地場産品の使用としては、内装工事の造作材に青森県産杉、ひばなどを、内部ゲートと柱の一部に津軽塗を施す計画です。